

旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部
会員向けニューズレター
発行人 古川 彰久
事務局 〒252-0321 神奈川県
相模原市南区相模台 1-23-9
Tel.&Fax.
042-748-8240
<http://www.jouhan.com>
E-mail: info@iki2life.com

1 月例会ご案内

1 月 1 2 日 木曜日 18:30 ~ 21:00
テーマ : アメリカ大統領選について
場所 : 港区商工会館
参加費 : 1000 円
担当 : 石田 金次郎

アメリカの大統領選は、共和党トランプ候補が勝利した。得票数では、民主党ヒラリー・クリントンがドナルド・トランプより 200 万票を多かったが、獲得した選挙人の数は、ヒラリーが 218 名、トランプが 289 名といった内容であった。

多くのメディアの予想を裏切ってトランプが勝利した理由は、新興国の台頭で苦境に陥った白人労働者層の不満が爆発した結果と言われている。グローバル化と格差の関係が一向に改善されず、民主党オバマ大統領の変化を期待したが、NATO (NO ACTION TALK ONLY) の姿勢に裏切られ、クリントンが敗れたのは既存政治の延長で変化を期待出来なかったからだと言われている。このような現象は、先立つ英国の EU 離脱の Brexit にも見られる。

トランプの選挙の主張は、アメリカ第一主義、MAKE AMERICA GREAT AGAIN をアメリカ国民に語りかけた。アメリカは世界の警察官役はやらない、そんな余裕はない。主張の政策の内容の一部をいえば、貿易では、TPP や NAFTA はアメリカの雇用・産業にマイナスであるので脱退や破棄するとか、環境のパリ協定に反対し石炭産業の雇用を図るとか、メキシコとの国境に壁を作り国内の労働者の雇用をまもるなど、そして老朽化したインフラを立て直すために大規模なインフラ投資し、法人税などの減税政策で成長を押し上げるといった内容である。

これらを就任後 100 日の間に政策を立案・実行していくために政権移行チームを作って、トランプ新政権の陣容を検討してきた。それは 12 月半ばにはほぼ固まってきている。

主要な陣容を言えば、副大統領はマイク・ペンス、国務長官はレックス・ティラーソン (エクソンモービル CEO)、国防長官はジェームズ・マティス (元中央軍司令官)、財務長官はスティーブン・ムニューチン (ゴ

ールドマン・サックス出身)、大統領補佐官はマイケル・フリン (前国防情報局長)、国家経済会議委員長はゲーリー・コーン (ゴールドマン・サックス COO)、国土安全保障長官はジョン・ケリー (海兵隊退役大将) などである。この陣容の特色と言えば、軍人・CEO 政権で、反オバマ色の強い政権だそうである。

これまでのトランプの言動に絡んで、経済面ではドル高となり、新興国通貨の下落を招き、日米の株式市場ではトランプ相場と言われる株価上昇、中国に対しての為替操作非難、南シナ海の中国の勝手な活動非難、台湾が絡んでの一つの中国論、公海上での中国によるアメリカの無人潜水機事件と厳しい中国に対しての姿勢がある。欧州、日本、韓国には国防ただ乗り論、色々な影響が出てきている。

新たなトランプ新政権であるが、1 月 20 日の大統領就任後に、新政権の陣容のメンバーがトランプの意を受けてどのような政策を打ち出してくるかが今後の注目のポイントである。

一方、ヨーロッパでは、12 月に憲法改正を巡る国民投票があり、レンツィ首相辞任、オーストリアでのやり直し大統領があり、辛くも保守がまもった。2017 年に入ると 3 月にはオランダ議会選、ローマでの EU 会議、3 月末までの英国の EU 離脱通告、4~5 月にはフランス大統領選、秋にはドイツ連邦議会選と重要な政治イベントがあり、移民問題やグローバル化のもたらしている格差問題がどういう風に絡んでくるのか予断を許さない情勢ではないかと思う次第である。

11月例会報告

11月10日 木曜日 18:30 ~ 21:00

テーマ : 城野先生遺稿
古事記中国語原本と翻訳
第5回

場所 : 港区商工会館
担当 : 郷津 光

「古事記」の可能性に関する検討

2016年11月10日 郷津 光

1. 古事記について

概要

古事記の冒頭にて、712年(和銅5年)に太安万侶が編纂し元明天皇に献上したと記載されている。古事記より前に存在していた書物(天皇記、国記など)が蘇我蝦夷の放火によって焼失・焼損した¹後に編纂されている事や、日本書紀との共通性等の根拠から、消失・焼損した書物や口伝等を基に作成されたのではないかと考えられている。

原本は現存しないが写本として伝わる。最も古いものは真福寺の僧によって写された「古事記・国宝真福寺本」である。国学者・本居宣長の研究・翻訳対象となる事によって、江戸時代以降「国学」形成の出发点ともなった。更に明治時代以降は第二次大戦の終戦に至るまで天皇を絶対化・神格化する役割を果たした。

戦後も多くの研究者によって調査・研究が進められているが、多くは本居宣長の翻訳を基礎あるいは前提としている点に特徴がある。

内容

単に日本で最も古い歴史書とされているから貴重なものであり、その内容については「日本国の優越を証明する書物ではない」等として格別の価値を認めないという立場もあり得る。また、科学・情報技術の途方もない発展と、ボーダレス化・グローバル化が促進し混沌とする世界情勢にあって「民族優位性の証明」として古事記を利用しようとするれば、戦前と同様の罠に陥り内容の誇大解釈等の結果価値の大半を失うのではないかと。

しかし、近年の急速な科学・技術の発展に伴う全世界規模でのボーダレス化・グローバル化に伴う民族・文化間の摩擦の顕在化・激化は同時に、文化の相互尊重の必要性、および日本人のルーツ探求に関する意欲を増大させている可能性がある。

その点、「古事記」の内容を「個人の神格化・民族優位性の証拠としての道具」ではなく、「ルーツをたどる資料」として捉えなおすのであれば、強い需要が生じる可能性がある。

現状「古事記」そのものに対する関心は、特に若者の間で著しく低く、フィクション等の題材あるいは昔話の一部として断片的に知る事はあっても、主に本居宣長注釈古事記そのものの理解の困難さもあって、広く内容が伝播しているとは言いがたい。仮に需要を喚起しようとするのであれば、古事記そのものへの捉え方の国内における広範な転換が必要であると思われる。

2. 城野先生の古事記に対する捉え方

古事記に対する姿勢

城野先生は著書の中で「伝説、神話も民族の祖先たちの生活表現であり、文化的遺産にほかならない。その遺産は後代のものも先代の経験として自己行動の参考にしてよい」²とし、古事記の研究について、「古事記の中にふくまれる部分的事実の中から、日本の古代人たちがどのように行動したかを追求し、人間行動としての歴史の真実を見出そうとする試みである。そして日本民族が自己の歴史の真実を見つめ、常に正直で誠意ある民族として行動し、ますます深まっていく国際関係のつながりの中で、立派に生きていく力としたい」³と述べている。

上記の姿勢は、古事記の内容を神聖視するでもなく、あるいは単なる権力者の道具として排斥するのではなく、日本国の文化的遺産として研究の対象とする事で日本人が国際社会で活躍する人となれるよう古事記を活用しようとする試みであると言える。

古事記の特徴

城野先生が、本居宣長注釈古事記ではなく、古事記真福寺写本の内容を中国語として捉えなおし、独自に検討した結果「古事記伝説はセックスと政権争いによって成り立っている。それは著しい特徴である。」⁴と述べている。詳しくは『古事記と人間』城野宏、2006 啓明書房を参照されたい。

内容の評価

古事記真福寺本の内容について、本居宣長注釈古事記や明治時代以降の解釈との違いを挙げつつ、「華やかで荘重な支配者による民衆圧迫、征服と奴隷化の野に咲く華麗なる英雄の歴史ではなく、ごく普通で、平凡ではあるが、普遍的な誰にでも理解され、愛され、同情できる人間性と人間の歴史である。古事記はこの意味においてこそ優れた歴史的記録であ

1 『日本書紀』皇極4年6月

2 『古事記と人間』城野宏、2006 啓明書房 14 頁

3 『古事記と人間』城野宏、2006 啓明書房 16 頁

4 『古事記と人間』城野宏、2006 啓明書房 68 頁

ることが出来る」⁵と評価している。

平易な中国語で書かれた真福寺本に直接当たり、慎重にその内容を吟味すれば、本居宣長注釈古事記の様なわかりにくく深淵で壮大な古事記像ではなく、ごく有り触れた人間の生々しい心理が描かれた古事記像が浮かび上がると指摘している。

3. 検討

①・②を条件として、城野先生の描く「古事記」像が、今後日本社会から広く求められる可能性があるのか、下記検討する。

【城野宏翻訳古事記の意義】

本居宣長注釈古事記が多くの古事記研究の前提とされる中であって、そういった高尚さ・深遠さを否定する城野宏翻訳古事記は、日本国内で広く受け入れられる事はないとも思える。そして、古事記自体は前記「1. 古事記について 内容」で扱った様に、技術革新・世界情勢変化の中で突発的に需要が喚起される可能性がある。

仮に「古事記」を建国神話として絶対視すれば多くの齟齬が生じる事は、城野先生が著書で再三にわたり指摘している。文化の相互主義を離れて自己の生まれつきの優位を主張する目的で利用すれば摩擦を強めるだけになりかねない。

その点、城野宏翻訳古事記は、古事記に対する潜在的需要に答えつつ、虚飾等の不都合を回避する為に効果的であると考えられる。また本居宣長注釈古事記が前提となっている古事記研究に対する有効なカウンターとなり得る。これらの点で貴重な存在であると言える。

【城野宏翻訳古事記が与える影響】

皇室の問題は国民の関心事であり、その最中であって城野宏翻訳古事記は「天皇陛下も人である」という当然の事実をより明確にするものであると言える。しかし、同時にこれだけの国民的関心事である事柄について、よりよく理解するきっかけともなるのではないか。多くの日本人が敬愛する今上天皇と皇室について、戦後70年を経て現在大きな岐路に立っているとも言える。別世界の話ではなく、この国を支える国民の一人として、当事者意識をもってこの国の行く末に思いを馳せる、そのきっかけとして城野宏古事記は格好の材料ではないだろうか。

4. 終わりに

今現在、世界に存在し生活する人々は、過去から続く生命の連鎖の結果とも言える。文化の発生段階から今に至るまで「人は何処からきて何処へいくのか」という種の

起源、あるいは「世界は何故存在するのか」という宇宙の起源について、関心が尽きる事はない。その点、日本列島で過去作成された「古事記」という書物は、日本における独自の創世神話を紡ぎ、普遍的な問に答えようとした証拠であるともいえる。過去のない我々が存在しないように、過去を顧みない未来もまた存在し得ない。日本に住む個々人が自らの中に受け継がれる「人間性」を感じ未来を見つめなおすきっかけとして、「古事記」を検討しても良いのではないか。

⁵ 『古事記と人間』 城野宏、2006 啓明書房 193 頁

